Joseph John Spengler, *Population Change, Modernization, and Welfare*, 1974, iii+182 pp.

1. 本書は，数少ない経済人口学者の1人として多くのすぐれた著作を出しているアメリカの J. J. Spengler の最新の著作である．Duke 大学で長らく教鞭をとっていたが，現在は Ohio State University の教授である．本書は，出版社 Prentice-Hall の"伝統社会の近代化シリーズ"(Modernization of Traditional Societies Series) の一冊である．

2. 本書の特徴は，題名の示している如く，人口を中心とする極めて広汎な問題を取り扱っていること，そして特に著者のいっている如く"人口成長の世界的経済的諸側面を対象"としているということである．あるいは，いわゆる実体人口学の典型的な著作であるともいえよう．同じく Prentice-Hall の Foundations of Modern Sociology Series の一冊となっている D. M. Heer の "Society and Population" (1968) が形式人口学的色彩が濃厚であるのに対し，本書が人口と経済発展の相互関係に重点をおいていることを考慮すると，両書をあわせ読むことによって，人口研究の内容を理解することができよう．

3. 本書の特徴を別の視点からみると，人口の現段階的諸側面がすべてとり入れられ，極めて up-to-date のものであるということである．それは次のような章編成からもよういに理解することができる．

第1章　人口成長：過去と将来；第2章　人口分布：過去と将来；第3章　人口と自然環境；第4章　年齢構造；第5章　人口成長：コスト，便益と純効果；第6章　人口の適度；第7章　静止対増加人口；第8章　人口政策；第9章　これからの途：諸問題；第10章　人口と近代化

4. 上述の如く，本書は極めて多方面にわたっているため具体的にその特徴を指摘することはこんなんであるが，若干特記すべき点についてのべておこう．第1は，人口増加の経済的評価論である．第5章において，人口増加のもたらすコスト，便益，そしてこれらの差としての純効果を論じている．さらに引き続き，第6章においては適度人口を論じ，大人口が望ましいかどうかを検討している．そのことは，さらに，静止人口と増大人口の比較分析として第7章においてとりあげられている．著者は，どのような国においても物理的環境が有限であるという理由から，適度の大きさの人口の達成と維持ということは，人口増加率零の静止人口を含意するものであるといっていることが注目される．そして，同時に，人口増加率を零に低減することは，静止的経済 (static economy) を意味するものでない，というのは平均産出物は，このような人口増加率零の下においても増加を持続することは可能であるからである．といっている (p. 110 参照)．

5. 第2点は，"人口分布"についての著者の深い関心である．第2章は人口分布自体を扱った章であるが，さらに，第6章の"人口適度"の中で最後の第6節で"空間の適度" (spatial optima) にふれ，人口の空間における分布，地域人口，都市の大きさについても適度の概念が適用されるとのべている．そして，"人口の過度集中を防止し，空間における人口のもっとも望ましい分布をはかるために，社会コストと社会便益—すなわちすべての関連するコストと便益—の均衡を維持しようとするならば，集団的干渉が必要である"とのべている (p. 109)．さらに，第8章の"人口政策"の最後の節で"人口分布"を，そして第9章の"これからの途"の第2節で"人口分布コントロールの根拠"を論じている．

6. 著者は，先進国のみならず，開発途上国についても十分なスペースを割いて論じている．特に，注目されたことは，今日の開発途上国の文化に，西欧文化や日本文化の諸要素が十分に同化せしめられていたならば，今日多くの開発途上国が直面しているような人口上の障害は，はるかに少なかったであろう．といっていることである (P. 166)．

(黒田　俊夫)